

地下壕に司令部ごとと移転

そこで特攻隊の出撃命令を伝達した

高女から学徒通信隊へ

戦局が険しさを増す昭和19年9月、旧制鹿屋高等女学校（現鹿屋高校）に在学していた私は、学徒動員で海軍鹿屋航空基地の学徒通信隊に入隊しました。16歳の時です。

入隊に際しては、体格や聴力の検査はもちろん、軍の機密事項を扱う部署であったため、家庭環境などが細かく調べられ、鹿屋高等女学校から25人が選抜されました。このほか高山・末吉・志布志の各高等女学校からも集められていました。

重要な任務

通信業務は基地内のビルの一室に設けられた作戦電話室で行われ、海軍省からの電話の内容を書きとめ参謀室に伝えたり、参謀が立てた作戦を申良や国分、出水などの各航空隊へ伝えたりする重要な任務を負っていました。秘密を守ることも徹底



写真館で記念撮影する通信隊の仲良しメンバー（後列左が岩重ナツエさん）

通信隊の勤務と生活

隊員は24時間3交代制の勤務で、共同生活を行っていました。入隊して1か月は板張りの三角兵舎に寝泊りし、その後は軍が借り上げた大きな民家に皆で住んで、毎日職場まで往復しました。月に1度実家に帰宅することができましたが、勤務を終えた後に1晩泊まって翌朝すぐに出て行くので、家族との会話はほとんどできませんでした。職場での服装は長袖のシャツ

とモンペで、3着を着回しました。白の長袖シャツも持っていましたが、外に出ると目立つからと、のちにカーキ色に染められました。

空襲を期に司令部ごと壕へ

昭和20年2月には、鹿屋航空基地に第五航空艦隊の司令部が置かれ、私たちも司令部配属に。そして同年3月頃から、米軍による鹿屋市への空襲が始まると、司令部ごと基地近くの山に掘られた地下壕へ移ることになり、以降、私たちは地下壕の中で通信業務に当たりました。

特攻隊の出撃命令を伝える

戦況悪化に伴い、特攻隊の出撃命令が増え、これを各航空隊に伝えることが、私たちの主な業務となりました。特攻隊の出撃命令は、「明日、黎明攻撃」というふう伝えていました。私たちは皆、「お国のためにと一生懸命に働きましたが、私



元学徒通信隊 岩重 ナツエ さん(89歳)

「終戦まで必死に働いた人がいるからこそ、今の日本があるということも忘れないでほしい」と語る

ちと同じくらい年の特攻隊員もいて「かわいそうだね」と通信隊仲間て話すこともありました。ある時、出撃前の特攻隊員から「あそこにいる女性に渡してほしい」と手紙を渡され、顔見知りでない電話交換手に、緊張しながら、その手紙を届けたことがありました。最期に何をしたためたのでしょうか。

仲間たちと続く友情

通信隊は厳しい規律の中での業務でしたが、皆本当に仲良しでした。地元に残っている旧友たちで「すみれ会」と称して、戦後までもない頃から今日までずっと、月に1度集まって顔を合わせています。人数は年々減ってきていますが、皆、この集まりを楽しみにしています。

終戦・解散

7月下旬に司令部が大分に移った後も、鹿屋高等女学校出身の隊員だけは、引き続き地下壕の中で任務に当たっていました。その後すぐに終戦となり解散。米軍が上陸したら女性や子どもは捕らえられる」との連絡が入ったため、皆急いで家に帰りました。

黎明の夜明けのこと

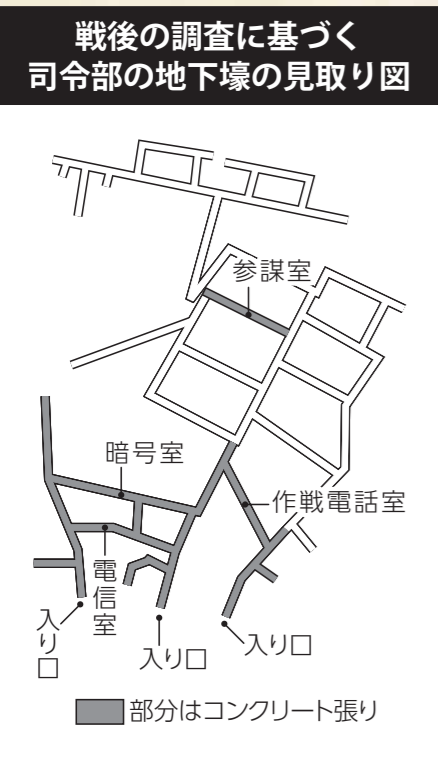
通信隊での体験は決して忘れられません。私たちは命を大切にしなければなりません。

地下にあった総延長700m以上の軍事要塞

昭和20年2月、組織的特攻作戦で起死回生を図るとして、海軍鹿屋航空基地に「第五航空艦隊」の司令部が置かれました。その一方で、新生町には既に巨大な地下壕建設が極秘裏に進められており、空襲が激化した3月になると、建設半ばながら徐々に司令部はこの地下壕に移転していきました。

地下壕は、シラス台地の約20m以上の地下にあって、コンクリート張りや素彫りの大小の通路が縦横に走り、総延長は700m以上に及びました。参謀室、作戦電話室、電信室、暗号室等はコンクリートで覆われ、箇所によっては、高さ約5

m、幅約5mという所も。出入り口は数か所あり、地上の基地からも斜めに掘られた通路で結ばれていました。この地下壕から、宇垣纏司令官らによる特攻機発進計画が練られ、鹿屋航空基地をはじめ、指揮下の申良・国分・出水などの各基地に出撃命令が出されたのです。



壁に釘などを刺せるように張られた参謀室跡の壁面の木レンガ
暗号室跡
作戦電話室と参謀室をつなぐ通路

司令部が置かれた地下壕で報道任務に当たった山岡荘八

作家・山岡荘八は昭和20年4月、海軍報道班員として鹿屋に着任しました。戦後、朝日新聞紙上で発表した「最後の従軍」という手記に、次の記載があります。「ようやく鹿屋に着くと、そこは完全な戦場だった。格納庫という格納庫は落弾や掃射のあとがあり、滑走路を除いてほとんど飛行場は穴だらけであった。（中略）息のつまる思いで、深い壕内へ案内されて配属を決められた。第五航空艦隊（司令長官宇垣纏中将）付」。

また次のような特攻隊員のエピソードもあります。山岡は出撃前の若い特攻隊員から、中身の処

理は任せるからと、突然封筒を手渡されます。そして、「その若者が乗る特攻機が突入したという無電が壕内の通信所へはいって来たら、山岡は封筒の中を見ます。すると、中に入っていたのは遺書ではなく、113円20銭という、少尉1か月の給料に近い現金でした。このことに山岡は「つろたえた」と記しています。

山岡は手記の最後に、鹿屋での出来事を「私の見聞の限りではみじんもウソのなかった世界……それだけに私もまた生涯その影響の外で生きようとは思っていない」と結んでいます。



山岡荘八が揮毫した「桜花の碑」(野里町)

作家・山岡 荘八
 やまおか そうはち
 明治40年新潟県生まれ。昭和17年から従軍作家として各戦線で活動。昭和20年、作家・川端康成とともに鹿屋に着任。戦後に発表した『徳川家康』はベストセラーとなった。昭和53年死去。

市ふるさとPR課では戦争体験談を随時募集しています。貴重な体験談を語り継いでいくために、ぜひお寄せください。